

# 第6章

## 宿題と家庭学習指導

- 第1節 宿題
- 第2節 家庭学習指導  
(邵 勤風)

序章

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

第8章

第9章

第10章

第11章

資料編

## 第1節

## 宿題

小・中学校の教員とも、02年調査に比べて、宿題を出す頻度が高くなり、また1日(1回)あたりの宿題の量は増えている。とくに小学高学年の増加幅が大きい。宿題の内容をみると、02年調査に比べて、小学校では「音読」、中学校では「定期試験対策になる内容」が大幅に増加している。【Q8-A(教員)】

## 1) 宿題を出す頻度と量が増加している

まず小学校教員がどのくらいの頻度で宿題を出しているのか、その経年変化をみてみよう(図6-1-1)。「毎日出す」の割合をみると、98年調査と02年調査では、8割台だったのに対して、07年調査では、9割に達している。一方、「2、3日に1回くらい出す」は、98年調査の9.9%から07年調査の2.2%に減少している。

では実際1日あたりどれくらいの量の宿題を出しているのだろうか。図6-1-2のように、98年調査から02年調査までの4年間では、数値の変化がみられなかったが、02年調査から07年調査までの5年間では、「15分」が17.5ポイント減少している一方、「45分」が10.3ポイント、「1時間」が7.7ポイント増加している。1日あたりの宿題の量として、平均時間を算出してみたところ、07年調査が02年調査より6.7分長くなったことがわかる。

さらに、小学校教員の担当学年段階別で、宿題を出す頻度と量の経年変化を確かめてみたい。こ

の章では小1生・小2生を「小学低学年」、小3生・小4生を「小学中学年」、小5生・小6生を「小学高学年」とする。図6-1-3によると、02年調査から07年調査まで、「毎日出す」の割合はどの学年段階も5ポイント以上増加している。とくに小学高学年では、増加幅が大きい(02年調査80.9%→07年調査93.3%、12.4ポイント増)。

また、担当学年段階別で07年調査の1日あたりの宿題の量を02年調査と比べると(図6-1-4)、小学低学年では「15分」が26.0ポイント減少し、「30分」が19.8ポイント増加している。小学中学年と小学高学年では「15分」と「30分」が減少し、「45分」と「1時間」が小学中学年では、それぞれ15.5ポイント、5.9ポイント、小学高学年では、10.4ポイント、15.4ポイント増加している。1日あたりの量を平均時間に換算すると、どの学年段階も、02年調査に比べて、平均時間が長くなり、とくに小学高学年では40分台になっている。

小学校の宿題の頻度と量を見てきたが、ここ

図6-1-1 宿題を出す頻度(小学校教員/経年比較)

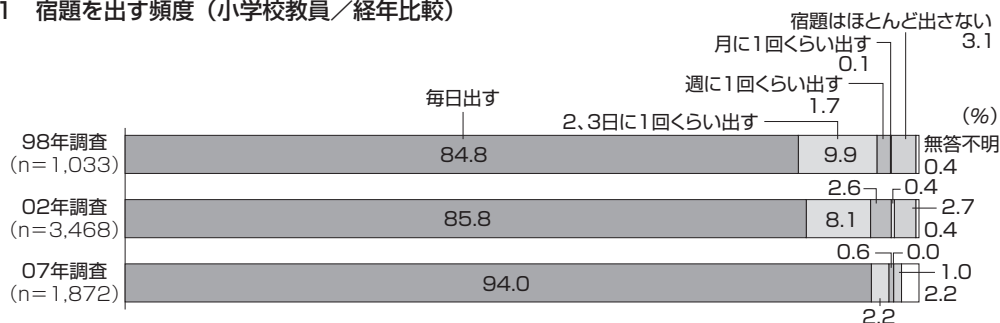
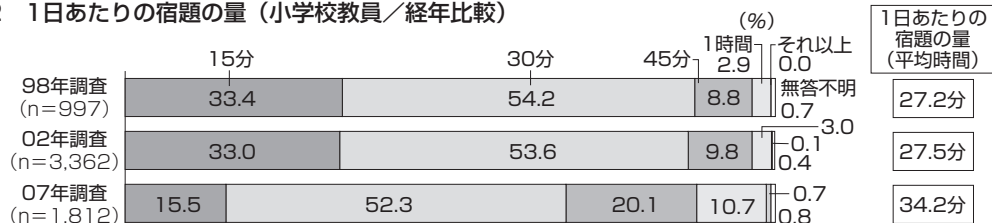
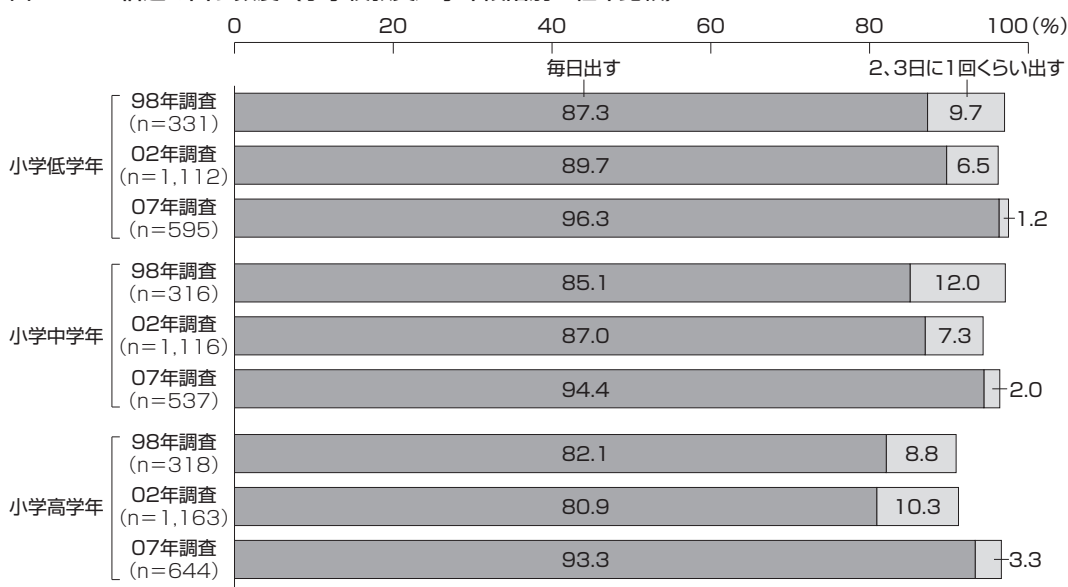


図6-1-2 1日あたりの宿題の量（小学校教員／経年比較）



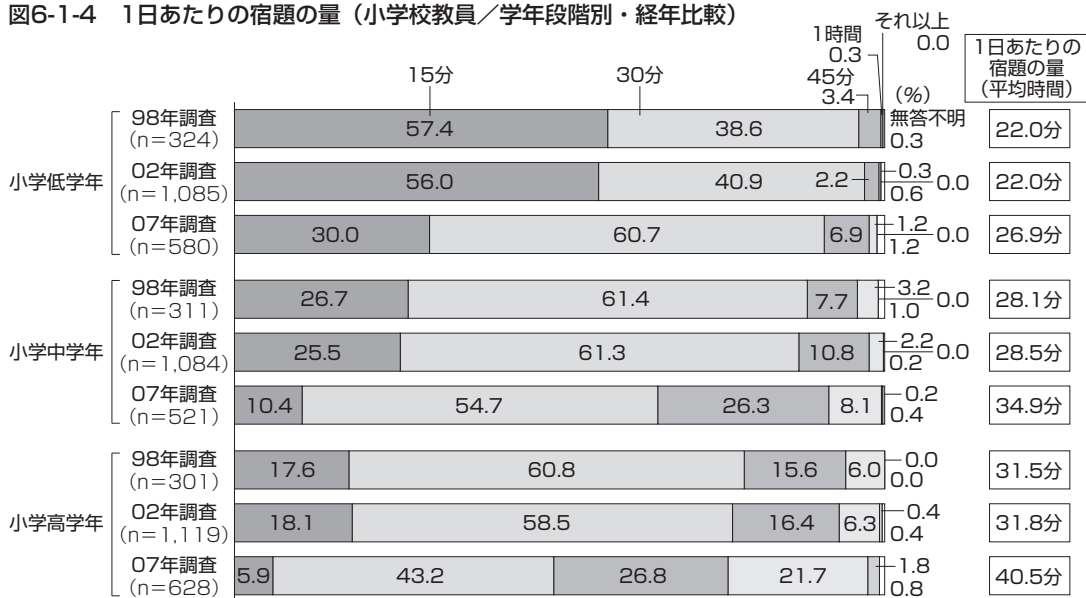
注1) 宿題を「毎日出す」～「月に1回くらい出す」と回答した教員のみ対象。  
 注2) 平均時間は、宿題を「毎日出す」～「月に1回くらい出す」と回答した教員のみを対象に算出。「15分」を15分、「1時間」を60分、「それ以上」を75分のように置き換えて、「無答不明」を除いて算出した。

図6-1-3 宿題を出す頻度（小学校教員／学年段階別・経年比較）



注) 「週に1回くらい出す」～「宿題はほとんど出さない」と「無答不明」は省略した。

図6-1-4 1日あたりの宿題の量（小学校教員／学年段階別・経年比較）



注1) 宿題を「毎日出す」～「月に1回くらい出す」と回答した教員のみ対象。  
 注2) 平均時間の算出方法は、図6-1-2と同様。

からは中学校について考察していきたい。中学校は小学校と同様な傾向がみられるのだろうか。

中学校は教科担任制のため、宿題を出す頻度の設問は小学校と異なり、また宿題の量は小学校のように「1日あたりの量」ではなく、「1回あたりの量」となる。したがって、小学校と比較する際、注意しながらみていく必要がある。

まず中学校教員の宿題を出す頻度をみてみると、07年調査では「授業のたびに出す」が02年調査に比べて、7.2ポイント増加している。それ以外の「授業2、3回に1回くらい出す」「授業4、5回に1回くらい出す」などはすべて減少傾向にある（図6-1-5）。1回あたりの宿題の量では、「30分」が若干増加していることがわかる（02年調査58.0%→07年調査61.3%、3.3ポイント増）（図6-1-6）。

つづいて、担当教科別に宿題を出す頻度をみてみよう。図6-1-7から07年調査の担当教科別の特徴をまとめると、国語では「授業のたびに出す」と「授業4、5回に1回くらい出す」がそれぞれ2割、「授業2、3回に1回くらい出す」が3割である。社会と理科は傾向が似ており、「授業4、5回に1回くらい出す」（社会22.4%、理科27.0%）と「授業2、3回に1回くらい出す」（社会21.1%、理科21.1%）に回答が集中している。数学では、「授業のたびに出す」と「授業2、3回に1回くらい出す」という回答がそれぞれ3割強である。外国語は「授業のたびに出す」が5割、

「授業2、3回に1回くらい出す」が3割である。つまり、もっとも頻繁に宿題が出されているのは外国語と数学である。次いで国語となっており、相対的に頻度が低いのは社会と理科のようである。

このような担当教科による宿題を出す頻度の違いは、それぞれの教科の特性に影響されていると考えられる。

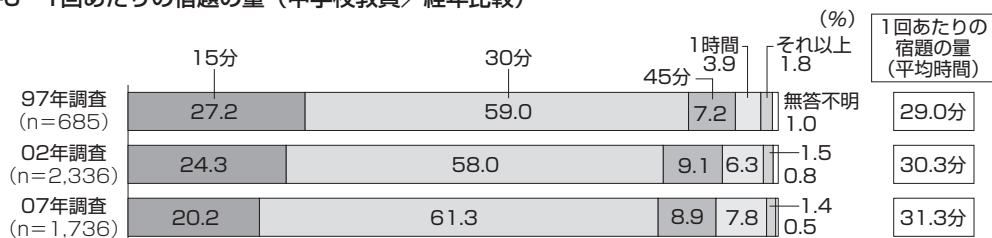
担当教科別での1回あたりの宿題の量では、どの教科も6割前後が「30分」に集中している。また、「15分」の比率をみると、社会（14.0%）、理科（12.9%）が低いのにに対して、数学（28.8%）、外国語（22.3%）が高い。国語（17.9%）は社会、理科と数学、外国語の中間にある。教科によって宿題を出す量が異なっていることがわかる。（図6-1-8）。

周知のように、「確かな学力の向上のための2002年アピール『学びのすすめ』」の公表（2002年1月 文部科学省）、「PISA2003」「TIMSS2003」の結果公表（2004年 国立教育政策研究所）、「全国学力・学習状況調査」の実施（2007年4月 文部科学省）に加え、近年多くの地方自治体でも独自の学力調査が実施されるなど、学力低下への懸念から「確かな学力」の考えが徐々に学校現場に浸透してきた。そのような背景が、02年調査から07年調査の5年間で、小・中学校の教員が出す宿題の頻度や量が増えているという結果につながっていると考えられる。

図6-1-5 宿題を出す頻度（中学校教員／経年比較）

	月に1回くらい出す				宿題はほとんど出さない (%)	無答不明 (%)
	授業のたびに出す	授業2、3回に1回くらい出す	授業4、5回に1回くらい出す	10.6		
97年調査 (n=938)	15.5	25.1	22.0	10.6	26.2	0.7
02年調査 (n=2,891)	18.4	30.5	19.7	12.1	19.0	0.2
07年調査 (n=2,109)	25.6	28.9	17.8	10.0	16.3	1.4

図6-1-6 1回あたりの宿題の量（中学校教員／経年比較）



注1) 宿題を「授業のたびに出す」～「月に1回くらい出す」と回答した教員のみ対象。  
 注2) 平均時間は、宿題を「授業のたびに出す」～「月に1回くらい出す」と回答した教員のみを対象に算出。  
 「15分」を15分、「1時間」を60分、「それ以上」を75分のように置き換えて、「無答不明」を除いて算出した。

図6-1-7 宿題を出す頻度（中学校教員／担当教科別）

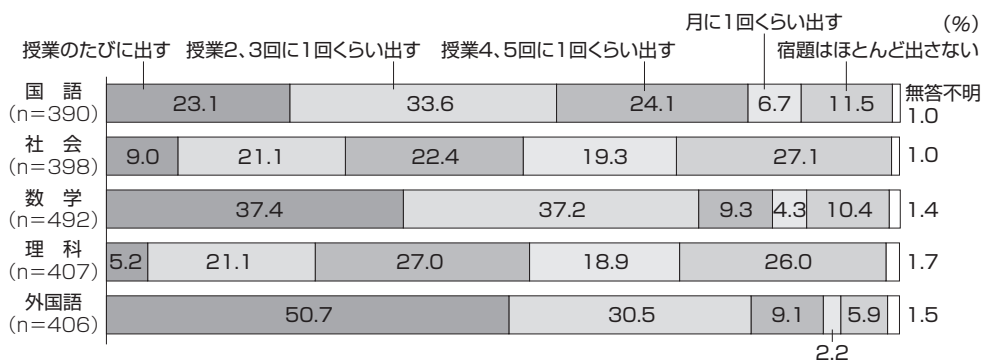
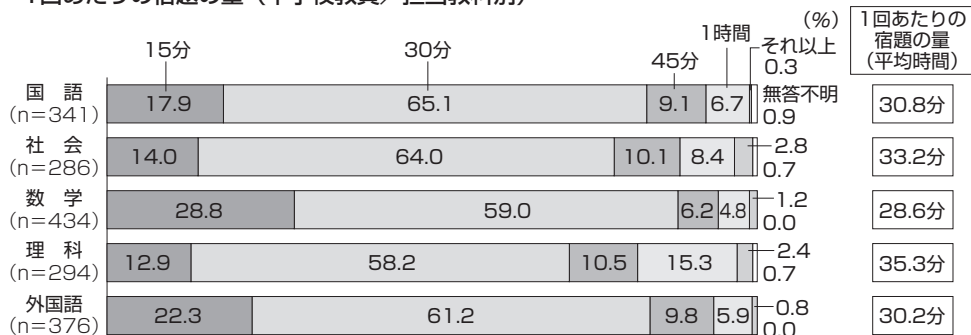


図6-1-8 1回あたりの宿題の量（中学校教員／担当教科別）



注1) 宿題を「授業のたびに出す」～「月に1回くらい出す」と回答した教員のみ対象。  
 注2) 平均時間の算出方法は図6-1-6と同様。

## 2) 宿題の内容は小学校では基礎基本の定着を図るもの、中学校では定期試験を意識したものが多く

「確かな学力」の考えの学校現場への浸透、小・中学校教員の努力で、宿題を出す頻度と量は確実に増えている。それでは、どのような内容の宿題を出しているのだろうか。

小学校における宿題内容の経年変化をまとめたのが表6-1-1である。8項目のうち、変化がみられたのは「学校指定の副教材、問題集」と「音読」の2項目のみである。「学校指定の副教材、問題集」は、98年調査から02年調査の間、一旦数値が下がっていたが、07年調査では02年調査に比べて、5.0ポイント増加している（「よく出す」+「たまに出す」の%、以下同。98年調査90.3%→02年調査68.8%→07年調査73.8%）。また「音読」は、02年調査の86.3%から07年調査の93.5%に、7.2ポイント増加している。「確かな学力」の定着を図るため、基礎基本の指導を重視する小学校教員の姿勢がうかがえる。

表6-1-2は小学校教員の担当学年段階別に経年変化をみたものである。小学低学年は、「調べ学習」のみが02年調査の27.7%から、07年調査の21.9%へと、5.8ポイント減少している。それ以外の項目では、大きな数値の変化はみられなかった。小学中学年では、07年調査が02年調査に比べて、「学校指定の副教材、問題集」で5.5ポイント、「音読」で6.4ポイント、「自作プリン

ト」で4.6ポイント増加している。小学高学年になると、02年調査に比べて「教科書の問題」（6.4ポイント増）、「学校指定の副教材、問題集」（10.4ポイント増）、「音読」（13.6ポイント増）、「調べ学習」（4.9ポイント増）、「自作プリント」（4.7ポイント増）と、多くの項目で増加している。

ここまでの結果から、以下3つのことがわかる。1つめは、07年調査における「学校指定の副教材、問題集」「音読」の全体数値の上昇は小学中学年と高学年の数値の大幅な上昇によるものだと考えられる。2つめは、どの学年段階でも宿題の内容は基礎基本の定着を図る目的の「計算や漢字などの反復的な練習」「音読」が中心となる。3つめは、学年段階が上がるにつれ、基礎基本の定着を中心しつつ、「調べ学習」といった既習の知識・技能を活用する宿題が増えている。

次に、中学校の宿題の内容をみていこう。表6-1-3はその経年変化を表したものである。「自作プリント」（97年調査62.1%→02年調査56.9%→07年調査63.1%、以下同）、「調べ学習」（31.7%→23.9%→33.0%）、「高校入試対策になる内容」（31.3%→23.5%→32.9%）の3項目は、02年調査で一旦数値が落ち込んだ後、07年調査では数値が97年調査なみに戻っている。「定期試験対策になる内容」は02年調査に比べて、07年調査では64.2%と、11.9ポイント増加している。

中学校の宿題内容の上位5項目は「学校指定

表6-1-1 宿題の内容（小学校教員／経年比較）

(%)

	98年調査 (n=997)	02年調査 (n=3,362)	07年調査 (n=1,812)
教科書の問題	53.1	54.2	56.7
学校指定の副教材、問題集	90.3	68.8	73.8
計算や漢字などの反復的な練習		97.2	98.6
音読	86.0	86.3	93.5
自作プリント	64.9	63.0	65.0
調べ学習	42.8	44.1	44.3
将来、国・私立中学校や高校入試対策になる内容	0.5	0.5	1.3
授業でやり残した作業や課題	53.1	50.0	49.8

注1) 宿題を「毎日出す」～「月に1回くらい出す」と回答した教員のみ対象。

注2) 数値は「よく出す」+「たまに出す」の%。

注3) 「計算や漢字などの反復的な練習」は98年調査ではたずねていない。

の副教材、問題集」(81.7%)、「授業でやり残した作業や課題」(67.9%)、「定期試験対策になる内容」(64.2%)、「自作プリント」(63.1%)、「計算や漢字などの反復的な練習」(58.6%)である。中学校の宿題内容をみると、やはり定期試験を意識したのが多いと感じる。

表6-1-4は中学校教員の担当教科別にみた宿題内容である。いずれの教科でも5割を超えているものは「学校指定の副教材、問題集」「自作

プリント」「定期試験対策になる内容」「授業でやり残した作業や課題」である。「計算や漢字などの反復的な練習」については、国語、外国語、数学が7割を超えているが、社会、理科は2割弱にとどまっている。「教科書の問題」は、数学だけが8割を超え、他の教科は3～5割程度である。宿題内容についての回答割合の違いはかなり教科の特性を反映していると考えられる。

表6-1-2 宿題の内容（小学校教員／学年段階別・経年比較） (％)

	小学低学年			小学中学年			小学高学年		
	98年調査 (n=324)	02年調査 (n=1,085)	07年調査 (n=580)	98年調査 (n=311)	02年調査 (n=1,084)	07年調査 (n=521)	98年調査 (n=301)	02年調査 (n=1,119)	07年調査 (n=628)
教科書の問題	36.8	46.0	45.5	61.4	57.0	60.1	62.4	59.1	65.5
学校指定の副教材、問題集	85.8	68.0	66.1	93.2	70.1	75.6	92.7	68.6	79.0
計算や漢字などの反復的な練習		97.7	98.7		97.7	99.6		96.7	98.0
音読	96.3	95.4	97.4	90.3	88.6	95.0	71.8	75.1	88.7
自作プリント	77.7	75.3	73.2	63.6	60.6	65.2	52.8	54.2	58.9
調べ学習	26.3	27.7	21.9	49.6	51.6	53.6	55.8	52.9	57.8
将来、国・私立中学校や高校入試対策になる内容	0.6	0.4	0.3	0.0	0.5	1.2	1.0	0.7	2.0
授業でやり残した作業や課題	42.9	40.3	39.7	58.5	52.4	53.7	58.5	57.7	56.5

注1) 宿題を「毎日出す」～「月に1回くらい出す」と回答した教員のみ対象。  
 注2) 数値は「よく出す」+「たまに出す」の％。  
 注3) 「計算や漢字などの反復的な練習」は98年調査ではたずねていない。

表6-1-3 宿題の内容（中学校教員／経年比較） (％)

	97年調査 (n=685)	02年調査 (n=2,336)	07年調査 (n=1,736)
教科書の問題	49.7	53.3	54.6
学校指定の副教材、問題集	79.1	80.5	81.7
計算や漢字などの反復的な練習		58.5	58.6
自作プリント	62.1	56.9	63.1
定期試験対策になる内容	49.0	52.3	64.2
調べ学習	31.7	23.9	33.0
高校入試対策になる内容	31.3	23.5	32.9
授業でやり残した作業や課題		66.3	67.9

注1) 宿題を「授業のたびに出す」～「月に1回くらい出す」と回答した教員のみ対象。  
 注2) 数値は「よく出す」+「たまに出す」の％。  
 注3) 「計算や漢字などの反復的な練習」「授業でやり残した作業や課題」は97年調査ではたずねていない。

表6-1-4 宿題の内容（中学校教員／担当教科別） (％)

	国語 (n=341)	社会 (n=286)	数学 (n=434)	理科 (n=294)	外国語 (n=376)
教科書の問題	42.8	37.8	84.8	41.5	53.7
学校指定の副教材、問題集	70.1	73.8	92.4	87.4	81.7
計算や漢字などの反復的な練習	89.4	19.5	71.7	19.1	76.1
自作プリント	59.2	72.4	57.6	56.8	71.3
定期試験対策になる内容	58.9	71.3	61.7	68.7	63.0
調べ学習	46.0	67.2	4.8	36.1	25.2
高校入試対策になる内容	27.3	36.3	35.0	35.3	31.4
授業でやり残した作業や課題	72.4	68.1	69.6	53.4	73.6

注1) 宿題を「授業のたびに出す」～「月に1回くらい出す」と回答した教員のみ対象。  
 注2) 数値は「よく出す」+「たまに出す」の％。

## 第2節

## 家庭学習指導

小・中学校の教員とも、家庭での学習時間の指導を行う比率、指導する学習時間が02年調査に比べて増加している。また指導する学習時間の平均については、小学校教員の担当学年別にみると、小1生では20分台だが、小6生になると、60分台に達している。【Q8-B(教員)】

本節では、小・中学校の教員が児童・生徒に対して、家庭での学習時間の指導をしているかどうかとその時間を概観する。

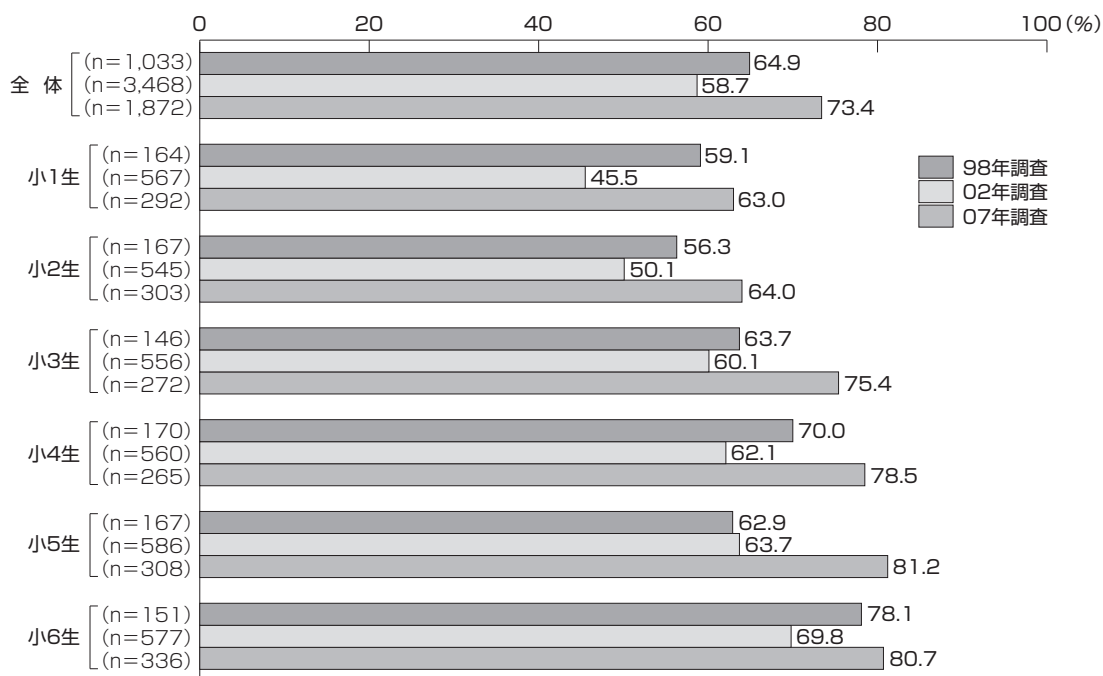
### 1) 小・中学校の教員とも家庭学習指導の実施率も指導する学習時間も増加している

まず、小学校の実態を確認していこう。図6-2-1は家庭での学習時間の指導の有無について、全体および担当学年別にみた経年変化を表して

いる。全体の推移をみると、02年調査では98年調査より指導している比率が減少したが、07年調査になると、6割であった98年調査の実施率を超え、7割に達している（98年調査64.9%→02年調査58.7%→07年調査73.4%）。

この9年間、小学校教員は宿題を多く出すようになっただけでなく、児童に対して、家庭での学習時間の指導を行う比率も高くなったことがわかる。前節で述べたように、学力低下へ

図6-2-1 家庭での学習時間の指導の有無（小学校教員／全体・学年別・経年比較）



注) 「受け持ちの児童に対して家庭での学習時間の指導をしていますか」の設問で「はい」と回答した%。



の懸念や「確かな学力」の考えの学校現場への浸透から、小学校教員が児童に対して家庭での学習を促し、学力向上を図ることを以前より重視するようになってきたと考えられる。

家庭学習指導の有無を担当学年別にみたところ、どの学年も02年調査に比べて、07年調査では数値が10ポイント以上増加している。07年調査では小1生でも6割を超え、小6生になると、8割に上った(図6-2-1)。

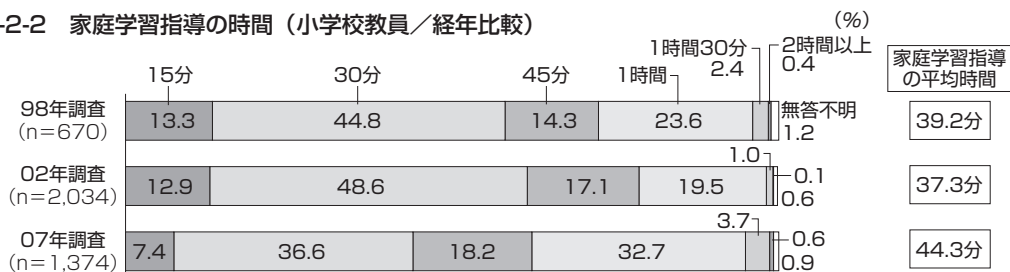
さて、小学校教員は児童に対して、家庭でどのくらい学習するように指導しているだろうか。この9年間の変化をみていきたい(図6-2-2)。「15分」は98年調査と02年調査では1割だった

が、07年調査では減少し、1割を下回っている。「30分」は98年調査と02年調査では4割台だったが、07年調査では3割に減少している。一方、「1時間」は98年調査23.6%→02年調査19.5%→07年調査32.7%と、大幅に増加している。平均時間は07年調査が02年調査に比べて、7.0分増えている。

担当学年別に家庭学習指導の平均時間の経年変化をみると、どの学年も増加している。また小1生は20分台なのに対して、小6生では60分に達しており、高学年のほうが増加幅が大きいといえる(図6-2-3)。

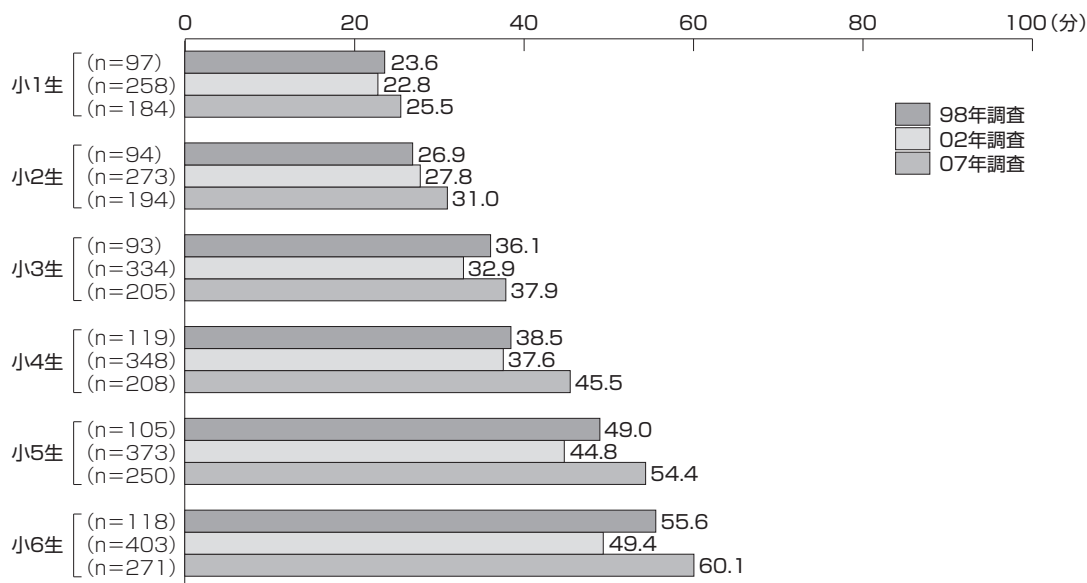
家庭での学習指導を行う比率の増加、指導す

図6-2-2 家庭学習指導の時間(小学校教員/経年比較)



注1) 「受け持ちの児童に対して家庭での学習時間の指導をしていますか」の設問で「はい」と回答した教員のみ対象。  
 注2) 平均時間は、「家庭での学習時間の指導をしていますか」の設問で「はい」と回答した教員のみを対象に算出。「15分」を15分、「30分」を180分、「それ以上」を210分のように置き換えて、「無答不明」を除いて算出した。  
 注3) 「2時間以上」は「2時間」「2時間30分」「3時間」「それ以上」の合計。

図6-2-3 家庭学習指導の平均時間(小学校教員/学年別・経年比較)



注1) 「受け持ちの児童に対して家庭での学習時間の指導をしていますか」の設問で「はい」と回答した教員のみ対象。  
 注2) 平均時間の算出方法は図6-2-2と同様。

る学習時間の増加から、小学校教員が家庭での学習指導を強化している姿勢がうかがえる。

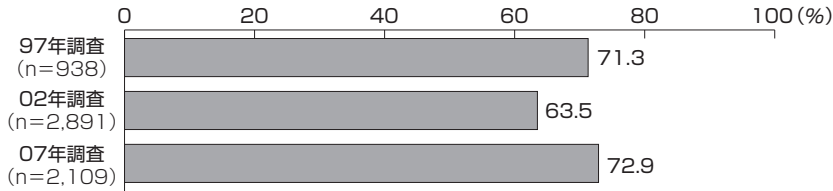
次に、中学校教員の家庭学習指導の状況を見ていきたい。家庭での学習時間の指導の有無について、図6-2-4に示したように、「はい」の回答割合は97年調査に比べて02年調査では減少していたが、07年調査では97年調査なみに戻っている（97年調査71.3%→02年調査63.5%→07年調査72.9%）。

家庭で学習するように指導する時間をみると（図6-2-5）、「1時間」が減少し（02年調査32.6%→07年調査27.3%、5.3ポイント減）、「2時間」と「3時間」が02年調査に比べて、それぞれ2.2ポイント、2.1ポイントと微増している。家庭学習指導の平均時間の経年変化をみると、07年調査は02年調査より3.3分増加している。

図6-2-6は07年調査について、中学校教員の担当教科別にみたグラフである。どの教科の教員も指導する家庭での学習時間のボリュームゾーンは「2時間」と「1時間」にある。「1時間」「1時間30分」「2時間」の合計は、「国語」が8割台、「数学」「理科」「社会」が7割台、「外国語」が6割台となっている。平均時間をみると、「国語」が100分を超えており、それ以外の教科も90分前後である。

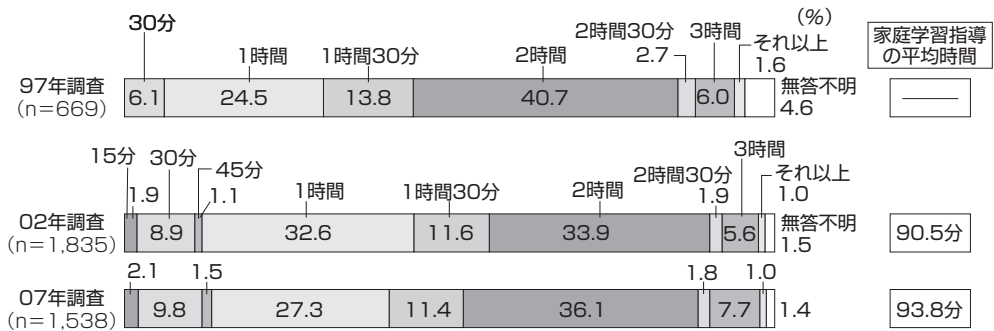
02年調査からのこの5年間、中学校教員が家庭での学習時間の指導を実施する割合が増加し、また指導する学習時間も増加していることがわかる。この増加傾向の背景には前述した小学校と同様に、学力低下不安と「確かな学力」の影響があると考えられる。

図6-2-4 家庭での学習時間の指導の有無（中学校教員／経年比較）



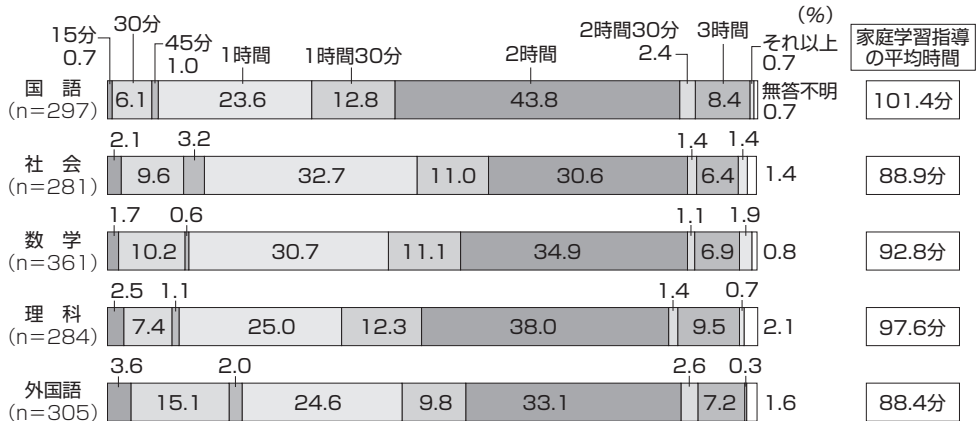
注) 「受け持ちの生徒に対して家庭での学習時間の指導をしていますか」の設問で「はい」と回答した方。

図6-2-5 家庭学習指導の時間（中学校教員／経年比較）



注1) 「受け持ちの生徒に対して家庭での学習時間の指導をしていますか」の設問で「はい」と回答した教員のみ対象。  
 注2) 平均時間の算出方法は図6-2-2と同様。  
 注3) 97年調査では「15分」「45分」についてははずねていない。このため、97年調査の平均時間についても、時間の選択肢の形式が他の調査年と異なるため、分析から除外した。

図6-2-6 家庭学習指導の時間（中学校教員／担当教科別）



注1) 「受け持ちの生徒に対して家庭での学習時間の指導をしていますか」の設問で「はい」と回答した教員のみ対象。  
 注2) 平均時間の算出方法は図6-2-2と同様。